ふるさと宿南

★　第１１４号　★
発行　令和　３　年　１月
宿南地区自治協議会
TEL・fax:662-3400
Email：kyosyukunami@maia.eonet.ne.jp

謹賀新年

本年も宜しくお願い致します。

新年のごあいさつ

会長　木下　計介

あけましておめでとうございます。

輝かしい新年を迎え、皆様のご健勝とご多幸をお祝い申し上げます。

昨年は新型コロナウイルスによる自粛を余儀なくされ、我慢の一年でありました。計画をしていたイベント等は総てと言っていいくらい自粛をし、多くの方々にはご迷惑をお掛けしたことと思います。

事業計画に挙げている行事、「ボウリング大会、宿南地区大運動会、村民号、盆踊り大会、文化祭」などまだまだたくさんの行事が中止となった事は大変残念でした。しかし、そんな中でも開催に向けていろんな方策を駆使して「喫茶ひまわり」を運営してだいていることや、水路掃除、クリーン作戦などの実施には大変感謝をしています。

このように、それぞれの専門部会が事業計画にそって、最善な安全策を取りながら事業を進めていただいている事にお礼を申し上げます。

次に、戦略的移住推進モデル事業は、昨年より始まり、３年間をひとくくりとした事業であります。今年は２年目と言う中心的であり且つ事業の今後を左右する年でもありました。そんな年であるにもかかわらず、新型コロナウイルス対策強化により、人と人との集まりが制約され、イベントの縮小による自粛が余儀なくされ、活動が思うように実施できなかったことは大変残念でした。しかし、そんな中ではありますが「癒しの里山、学びの里、魅力発信、空き家清掃」のそれぞれのプロジェクトチームは安全を確保しながら事業を進めているところです。中でも「空き家清掃プロジェクト」は、移住、定住推進計画の基本となる「住める住宅」の確保をするために地区内の空き家の清掃を実施し、入居できる住居を確保して、移住者を募集している所です。今後は「住める住宅」をまだまだ増やし、多くの人に住みよい宿南を今以上知ってもらい、移住するのに最適な街として考えてもらえるよう、進めていきたいと思います。今年は、戦略的移住推進モデル事業３年計画の最終年度に当たります。この事業が当初の目的を果たすまで持続していく事は勿論、もう一段階進んだ事業展開になるよう努力していきたいと思っています。

最後になりましたが、宿南地区はこのまま何もしなければ少子高齢化が進んで活気のない地区になってしまいかねません。その様な事にならないよう、お年寄りから若い方すべての方の知恵と労力をいただいて、住み良いそして活気あふれる地域づくりに努めて参りたいと思います。

つきましては、宿南地区の皆様の尚一層のご指導とご協力をお願い申し上げまして、新年の挨拶とさせていただきます。

ボウリング大会中止

２月２７日（土）に体育部主催で計画しておりましたが、新型コロナ感染症の終息が見えませんので**中止**いたします。開催を楽しみにされていた方もいらしたとは思いますが、ご理解下さい。

コロナ対策

「ふれあい喫茶ひまわり」に，飛沫感染防止対策でアクリル板を設置いたしました。少しうっとうしい感じがするかもしれませんが自分・他人に感染させないためにもご辛抱いただき楽しい時間を過ごしにお越しください。

お知らせ

１月１８日（月）～　　喫茶ひまわり営業再開

１月１８日（月）１月２１日（木）甘酒ふるまいあります。

但し**兵庫県**に**緊急事態宣言発令**の場合は、その**期間中**は**休業**いたします。ご了承願います。

営業再開日は、**改めてお知らせ**いたします。

２月　２日（火）　　節分

草庵先生紹介

日記　２６

今はよく整備されている天滝への道
濱篤さん作

池田草庵は天滝に行ってから約１ヶ月後、日記に次のように書いている。

「（前略）午睡から目覚めてから、『游天瀧記』をおよそ３，４枚書く」（嘉永元〈１８４８〉年５月３日）

天滝を見たことを「游天瀧記」として文章にまとめたのだ。それには草庵が天滝をどのように見たか、何に感激したのかなどを書いている。原文は漢文で、長くなるが意訳して紹介する。「嘉永元年夏４月７日、私は友人と塾生数人連れて、天滝の景色を見に行こうと書院を出発した。この日は夏梅村の鎌田氏宅に泊まる。翌日の８日は雨が激しかったが夜になって晴れてきた。この日は市場村の田村氏宅に泊まる。９日、天気は快晴、市場村や夏梅村の人に案内してもらう」「筏村の山中に入り、谷底を歩いたり、山の中腹をよじ登るように横切ったりして１キロほど歩いて、ついに目指す大きな滝、天滝に着いた。水は激しく流れ落ちている。

天滝というのは、流れ落ちる水が雲の間から落ちてくるからだろう。首を上げて仰ぐと、水しぶきは高い断崖の見えないところから激しく落ちている。たくさんの小さな光る球が、まるで長い糸がもつれて落ちてくるように見える。日の光は輝き、風は大きく鳴って、滝の勢いは激しく襲ってくるようだ。そこにしばらくたたずんでいると、めまいがして魂を奪われそうだ」「その辺の石に座り、草をしいて食事にし、酒を酌み交わす。心は清められ、俗界の汚れは流されていく。胸の中はすがすがしくなり、身も軽くなって、別世界にいるようだ。喜びでいっぱいになる。今までも有名な山や素晴らしい水の流れの景色のことを聞くことがあったが、これほどのものはなかっただろう。帰りには、少し歩いては振り返り、立ち止まり、詩の一つも口ずさんでいた。帰りたくないという気持ちだ。この日は平素の私の志をさらに確かなものにしてくれた」（「游天瀧記」から）

今も天滝は、草庵の見た時と少しも変わらず、雲の間から落ちるように流れ続けている。

池田草庵先生に学ぶ会